# 生乃シ想堂

瀬戸内海を臨むお寺、浄念寺は取り壊されることになった。
海に生かされた町の、海に生かされたお寺が姿を消していく

そんな、ここでの日常のほつれを
四つの御堂とそれらをつなぐ道で縫いこんでいく

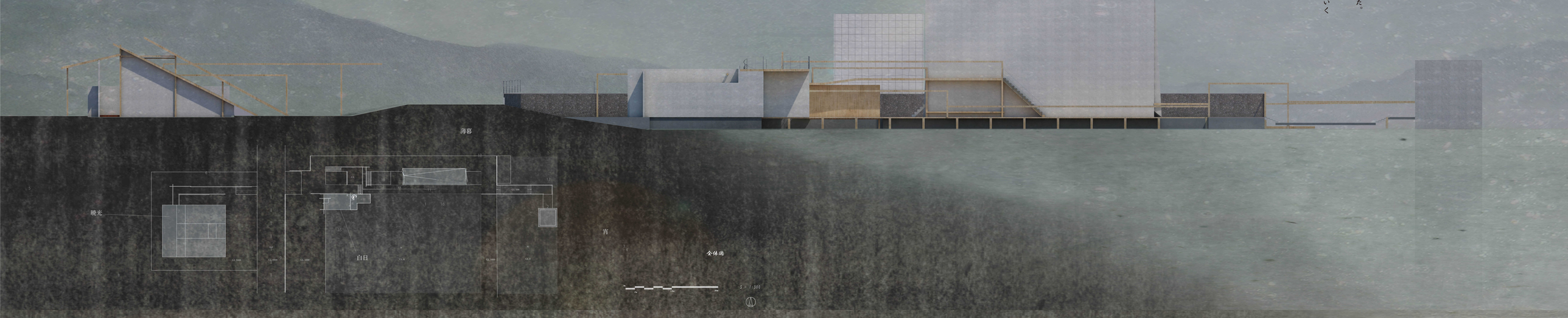
それらは「生と死」の概念の空間化
によって作られた空間

死は暗く、深く、重く、恐ろしい存在であると同時に
ただ、じっと変わらず生を見つめてくれる存在でもある。

ここは何もしない場所。
何かをしないといけないことがない場所。

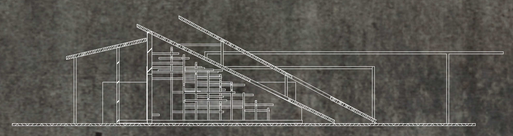
訪れる人の数だけ、想い感じることがある
何を感じ、どう解釈するかは自由です

それが建築にできる、生きていくことへの
優しさだと思いませんか




## 暁光

鳥の啼声が穏やに、調査のなかに溶けていく穏やかな海から吹く風はあの水を優しく建物へと流れ込む。朝の柔らかな光は水の粒子に反射を繰り返しながら空間を彩っていく。ふと窓の外を見たら十里と続く周辺砂空間。

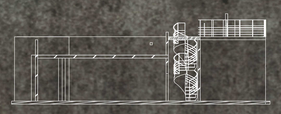


1 朝の光を取り入れるよう屋根を大きく東側に傾ける

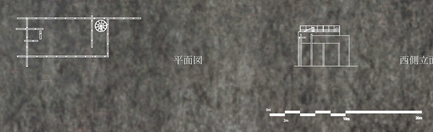
2 屋根を増やし、光をより限定さらに外部からのアプローチも考慮する

3 柱、梁を増やし、空間に二面性を持たしていく

## 白日



理想と残らず姿の光がヴォイド空間に溢れ、約四十平方メートル内の浄たい安穏空間を残らす。外部は見えないが残らされ、風が入り、波の音が聞こえる。移移に確かに存在する。

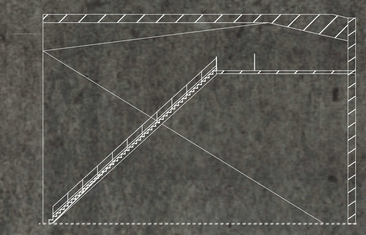



1 昼の光を取り入れるため上部のみ開口を設ける

2 光をさらに限定するため壁を突き刺しながら外部空間と繋ぐ

3 壁の配置や大きさを調整し、在と不在の二面性を作る

## 薄暮



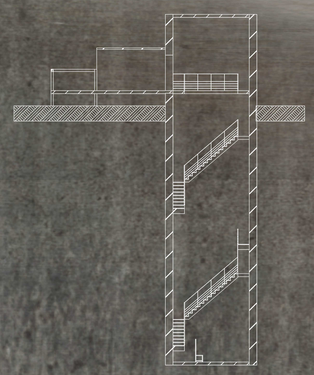
夕方になって日が彼方へ傾くと、山もこの建物も一様の影絵に。闇の空へ溶ます。
夕方のどうにもならないそうな感覚と思いをふくんだ感覚。
海と陸の周辺砂空間。

1 西側のみに開口をとる

2 内部空間をへこませて空間に抑揚をつける

3 長い階段をつけ、二面性を持たせる

## 宵



深海の静けさは重くなって、街灯の光にくるりと巻きつっていた。
海のすこし奥の、ずっと遠く、海と続いているはずの広い海にも温かくない、動きを封じた周辺砂空間。

1 光を入れないよう覆い海中に潜らせる

2 階段を螺伝いに巻き螺旋動線を作る

3 平行スラブを入れ、より歩行距離を伸ばすことで滑る感覚を助長させる

## 01 主題

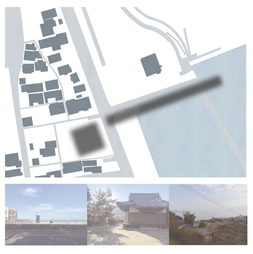
生は死と隣り合わせであり、死は人にとって身近なものである。しかし死という概念は宗教離れとともに日常から少しずつ切り離されていき、我々は死を意識の奥へとしまいこんで生きている。

死を考えることは生を考えることと同時である。それにより新しい生き方が見えてくるかもしれない。

そして死という存在が我々に生きていく小さな力をくれるかもしれない。

死の概念を日常に。死という存在が我々に生きていく小さな力をくれることを願う、私の提案。

## 02 敷地と背景



山口県岩国市由宇町。海によって生かされた町の一角に佇む寺、浄念寺。この寺も昔から海と密接な関係を持って在り続けてきた。そして浄念寺は数年後には解体されることになっている。

海に沿った国道をドライブする人、すぐそばにある海水浴場に来る人。海の横を通る電車で通勤する人。鬼ごっこをする子供。釣りをする人。ただ散歩をする人。

そんな静かな日常がお寺の消失によってほつれていく。その風景を「生と死」という概念によって作られた“御堂”そしてそれらを繋ぐ“道”で縫いこむ。

## 03 死と生の空間の創造

Martin Heidegger

ハイデガー哲学を参考に、生と死を「時間」という概念から空間化する。この世の中には、人間の生死に左右されることのない絶対的な時間が流れている。その中で、人間は各々自分の時間軸で生きている。つまりは相対的な時間を生きている。この相対的な時間の存在が、生を生たらしめるものであり、生の存在を了解させるものである。

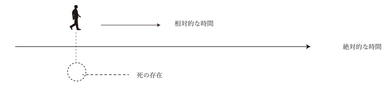
ここで、空間に二面的な要素を与える。死には時間が存在しないため各々の時間を持って訪れた人が二面的な体験をすることで生に対して同居的であり、背反的な概念である死という概念が浮かび上がってくる。これらの思考を建築として表すために、絶対的時間を可視的なものとして表すために太陽の動きそして月による潮の満ち引きから、形を作る。そしてそこに二面的な言葉からイメージした空間を形成していく。

i. ヒトの生や死に関係なく流れている絶対的な時間が流れている




ii. ヒトはそれに対し、各々の相対的な時間を生きている。この時間という存在が生そのものである

iii. 空間に”二面性”を与えると死の概念が浮かび上がってくる。




## 04 生乃シ想堂物語

朝、電車の音で目が覚めた。歳をとってからは朝が早い。以前のように台所から聞こえてくる物音で一日を始めることがなくなってから、心にぽっかりと穴があいていしまったような感覚の日々を送っている。
そして今日もまた、長い一日が始まる。

散歩に出かけた。昔からよく歩いていた道。空を見ると小さな鳥が電線の上に留まり鳴いている。潮の香りもすんとした空気も、何も変わらないはずなのに、なにかが足りない。けれどその理由を私は考えない。

毎朝ここへの散歩を日課にしてからは前ほど苦しくはなくなってきた。けれど同時に、忘れていくのではないかという恐怖心が生まれてきた顔や声、いろいろな思い出を。長く長くともにした時間を。

だけどこの場所は語りかけてくれているような気がしてならない。消えていくんじゃないんだと、あなた自身になっているんだと。朝の光を浴びながら、しわしわになった手でそっと柱に触れた。

私はからっぽ。親や先生に言われた通り生きた平凡な人生。
三か月前、突然の事故で旦那を亡くした。
いろんな手続きを終え、心身ともに疲れ切った私は外にでた。

あの人と昔ここを歩いた。お弁当を持ってきて、堤防に座って食べた。今思えば幸せだった。この桟橋を歩きながら今日はどこに行こうかなんて話して。私はあなたがいなくなって本当に空っぽ。

１人になりたくて、入った建物。人れない場所には力強い光が差し込んでいた。私にとってその光はなんだか優しかった。ほのかに暖かい空間が心地よく、私は椅子に座ったまま少し眠りについた。

眼が覚めると暗くなっていた。夜になったかと焦り急いで外にでた。良かった。まだ、夕方だ。海風に吹かれ、夕日を浴びて、深呼吸。いつもと同じ、でも少しだけ新しい今が始まった気がした。

家に帰りたくない。優しかったママはどっかにいっちゃった。パパは時々僕に暴力をふるう。学校が終わると、僕はよくここに来て時間をつぶす。

あの階段を登ったら、不思議なことが起こると友達が言っていた。
みんなはとんがり塔って呼んでる。不気味がって誰も近づきたがらないけれど、僕はこのとんがり塔がなぜか、好きだ。

知らない子がいた。おしゃべりをしているうちに、その子が自分と似ていると感じた。その子の腕にも、赤黒い、小さな花のような跡があったから。

音がしたので外に出た。毎年行われているお祭りの花火があがっていた。綺麗だねって言いながら二人で笑った。後ろを振り返ると、とんがり塔は空にあがった赤色の花を写し、ただ静かにそこに佇んでいた。

僕はよく、悩んだり困ったりすると父に相談していた。父は真面目な人で話をゆっくりと聞いてくれる人だった。父に話すということが、僕にとって自分の歩みを進めるための許可書のようなものになっていた。

許可書が受け取れなくなった僕はもう新しいことを始めることが怖くなっていた。もがきながら進んでいる自分が正しいのかもわからない。前に進めない。

中に入って潜った。ぐるぐるぐるぐる潜った。歩いても歩いても前には進めない。同じ空間をただ迷ってただ暗い底におちていく。

一番下まで降りた。何も答えは出ず。帰ろうと上を見上げた。そこには降りてきた、歩いてきた道が照明によって、綺麗に、優しい輪郭を見せていた。